

自殺することを推奨される青年ロボットが、
一人の家出少女と出会い、生きる喜びを見出
した上で自殺を決意する

「ロボット・アウェイ」

作・立直

年齢表記は
役者を探るとき
目安。
キャストがタイトル
これで見られる
その辺り。

「ロボット・アウェイ」登場人物

ノキオ : ロボットの青年
麻里 : ノキオの出会った少女
前嶋 : 麻里の父

ロボット管理委員 1
ロボット管理委員 2

演説者

1

○性風俗の店の外・夜

雨が降っている。ノキ才は傘もささずに、躊躇なく店の外に出て雨に打たれる。体にガタが来ているようなひよこひよこした足取りで歩く。

ふと路地裏に、十代後半の少女がいることに気づく。肩から大人びたポーチを掛け

ノキオ「もしもし」

ノキ才はしゃがみ、少女の顔をのぞき込む。

ノキオ「あなたは、雨の中にいると風邪をひきます」

麻里 「ん……」

ノキオーあなたがこんな場所で寝ていると、いろんな男たちが貴方に悪戯をしようとしめます。するとその男たちは得をします。私はそれを望みません。起き上がってください」

麻里 「帰る場所がないの……」

ノキオ「私はそんなことを聞いていません。
起き上がってください」

ノキ才、麻里の額に手を当てる。ノキ才は顔をしかめる。

○ノキオのアパート・深夜

四畳半しかないノキオのアパート。しかし、部屋の隅の本棚に「ロボット差別の実態」「新しい種・ロボット」「人類不要説」などの背表紙が並んでいる。

麻里はコンビニで買ってきたカップの
卵スープとコーヒ―牛乳を飲んでいる。ノキ
オは突っ立って、コンセントから充電してい
る。

麻里は、カップスプから口を離す
「ありがとう、ロボット君」

ノキオ「私はノキオと言います。ロボット君
とは言いません」

假令此等情形
(軒下) 寢起ぬ。
然るに之を流す。
工 遂に之を流す。
即ち之に書く。

彼の思想は二つは
一にも生かされて、
カイトでよい。

今にもつたのか？
どうかにいふまで。とどろく。
「ありかとう。」いふまで。
とノチオカ置つてた
ことにすると「ええ」
説明する。

○ノキオヒ麻里の日常

E x D x C x B x A

x x x x

x x x x

のふに~~おま~~下す。

ノキ才は顔をしかめる。

ノ子オの感情が分らない。

ニニカ... ラストの6段に对する。
 中その感情にまよつた。
 そゝゝ へかゝないのかと取不つた。

萬日生于己猫を

ほうこくとなく！
それと平手叩。

(百) 万 日 生 ず 不 猪 口 金 口 口 読 び
ない 象 做 表 現 と して ぼ け ない。

送る人
に
ネ
タ
バ
レ。

どう
す
う
も
ニ
ス
ト
ー
リ
ー
ニ
と
う
し

(五、四、三、二、一)

べ物を購入する。

の汚れに気づいて、それを落としてあげる。

ノキオが、小さなぬいぐるみを持って

十分にはずしたから」というのが
死の理由だとすれば、それは不容争ふ
ノゾオの言。女が(固)まっていた。

店から帰ってくる。麻里は喜ぶ。

麻里、ノキオに絵本『百万回生きたねこ』をプレゼントする。

麻里がうたた寝したので、ノキオが毛布をかけてやる。

ある日、ノキオは自分のアパートの扉に、「社会の害悪、ロボットよ スクラップにしてやる」という張り紙が貼られていることに気づく。

× × ×

○性風俗店街

ノキオ、やはりガタが来ているような風俗店街を歩く。ふと、壮年の男が演説していることに気づく。演説者の周りには、多数の人間と少数の新しい型のロボットたち（ノキオよりもシャープな見た目）が集っている。演説者「ゼロメタルは現在、非常に枯渇しております。これからの技術革新のために、あたらしい未来のために、皆さまの献身が必要です。どうか、二一〇〇年以前に製造されたロボットの皆さま、お願いです。自主的アウェイによつて、皆さまの体内にあるゼロニウムを、未来のロボットたちのためにご提供ください。あなたの命が、みんなのためになるのです！」

人間と新型ロボットたちは拍手をする。ノキオ、早足でその場を去る。

N「（ノキオの声で）麻里、もし、自分の命と引き換えに、赤の他人の、誰かの命が生まれることができれば、あなたはどうしますか？」
N「（麻里の声で）え？ うーん。どうだろう。ノキオは助けたりするの？」

N「（ノキオの声で）私はそれをしません。そんなことをしたら、沢山の人間が喜ぶ。人間は……いえ、新型のロボットも、誰も彼もみんな敵です。私は、敵の幸せのために、自分を犠牲にするなんて愚かなことはしません」

どうしてノキオは

目覚めには気づくのか？

それがここにないわけなんじゃない。

正直に言いたくない。

エグくてなかったか。明確に

まっくらな目も覚めた。

ないんではない。

「……い、かんじの世界観が

サリたかったんだけどね？

たとした。お指さとか

C G 屋になるべき。

にしても物は。そするんなん。

いすれ「ストリー」というもの

に向き合ってる。いける。

目かくる。

「物は。お助けたい」

というてもいい。

彼の目の理由は

「明、それがないに

明、か、でなければ

ならない。

彼は、「彼女に恋したから」

で「良い」と思う。

だからこそその意思を、

もっと上手にまっくらへした。

あの積りなんぞ、死ぬほど

少女マリアに殺されてる。

たとえは「シガーハット」と

見えていい。夏影の春と

ロボット研究所のようなところ。麻里は台の上に寝かされ、沢山のロボットアームによって修理がなされている。八十代の男・前嶋とノキオが、二人並んで椅子に座りながらそれを見守る。ノキオの片手には「百万回生きた猫」の絵本。

分かり易くするに
ノキオ博士(物)などと
交代してはどうか。

前嶋 「私の娘、すごいだろ？ 人間にしか見えないロボットだ。見た目だけじゃない。会話も、思考も。自分を人間だと思い込むほどに人間に近いロボットなんだ」
ノキオ 「博士はどうして、彼女を作ったのですか？」

前嶋 「昔……あの子の前に、もう一人、ロボットを作ったんだ。でもそのころは人工皮膚もまだできておらず、どう見てもロボットの外見だった。だから、反ロボット団体の人たちに、殺されたんだ……」

前嶋が、ふつと机の上の写真に視線をやる。そこには少しだけ若い前嶋と、ノキオと同じ型のロボット少女がいた。

前嶋 「今回、彼女を殺したのも、同じ団体の人間だろう。彼女がロボットだと嗅ぎ付けたんだ」

ノキオ 「……この世界は、残酷ですね」

前嶋 「そうだよ。……でも、麻里が生まれたのは、この世界なんだ。私が愛するものも、私が憎むものも、すべては、陸続きなんだ」

前嶋、背中を丸める。

前嶋 「だから私は、人間と変わらないロボットがいるべきだと思ったんだ。いまだに对立する二者の架け橋になるようなロボットが。そうすれば、人間だのロボットだの差異なんて些細なことだとみんな気づく。ロボットが本当に人間の友となる世界に、ぐつと近づけるはずだ……」

麻里の治療をしているシステムから、警告音がなる。

前嶋 「ロボットだって……人間と同じなんだ。神様……私の命なんていらぬ。だから、

あの子を助けてくれ……麻里……」

麻里の治療をしていたロボットアームや作業台が、徐々に作業をやめる。メインモニターに、「Away」の文字が浮かぶ。

前嶋博士、大声で泣き崩れる。ノキオは「百万回生きた猫」の絵本に目線を落とす。

○ロボット管理委員会の建物の外

ノキオ、穏やかな表情で、ロボット管理委員会の建物を見上げる。

彼の手には書類があり、そこには「自主的アウェイ申請書類」と書かれている。

ノキオ、ロボット管理委員会の建物の
中へと向かっていく。

○T「ロボット・アウェイ」（小さい文字で）

了

足やうなういゝ死ぬ？
 ていうか物ほろむか？
 パーツ取替へないよな？

17才
「私は
4才まわ
りになる
のですか？」
L

とA
そう
だ。
沢山の
ロボット
達の
材料
になり

人間的な幸福に尽くすのた

／
フ
オ
私
は
そ
れ
を
ご
ま
ま
せ
ん

B
人肉たろ幸福とは限らない。
ロボットと

人向の加木橋のりボルトもまわった。
竹第のせいで、
王良の

777
福に
77
30
か
く
3
L

14 は 3 4 5 6 7 8 9

というストライク。
オ4
下かも。

Tと
る
と
こ
れ
を
逆
算
で
つ
く
る
の
だ。
。

上とえは、
 麻里にひ
 假氏ロボ
 ツカいる
 せむロニ
 4が足
 リヌいと
 分かるか

加を返り。ふかつ假名の以信得る者には

「不」には「ノ」の音のついでに「ロ」の音が必ず来て、「ノ」の音が来なければ「ロ」にならなからうか。

死なば假令の一世にてもかゝる

いゝても送金で1/100の減定をくろるゑる。